平成２６年度 第２回 佐倉市立美術館運営協議会

議事録

日　時：平成２７年２月２２日（日）　１４：３０～１７：３０

場　所：佐倉市立美術館　４階会議室

出席者：以下のとおり

（委　員　７名）
加藤委員、齊藤委員、田中委員、豊田委員、樋田委員、広本委員、
村田委員
（美術館職員　７名）
宍戸館長、木邨学芸員、永山学芸員、村岡主任主事、西川主事（学芸員）、
山本主事（学芸員）、流主査補

会議次第
１．開　　会
２．あいさつ
３．報告事項
・平成 25 年度事業報告について（公　開）
・平成 26 年度事業計画等について（公　開）
４．作品の受け入れについて（非公開）
５．閉　　会
＜展覧会鑑賞＞

【報告事項】

平成 26 年度事業報告について
＜美術館から説明＞

(委員) 平成 26 年度の事業報告と白書などについて、皆さんから何かご質問などありますか。この白書は公になっているものですね。こうして出していただい

たのは初めてのことですので、よかったと思います。もう少し踏み込んで事業費とか作品購入費とかについてはどうなのでしょうか。
（美術館）作品購入については、ここ数年は行っていません。事業費については人件費も含めまして1億4千万円ぐらいです。
(委員）全体がそれぐらいということで、そのうちのどれぐらいが、例えば展覧会関係になるのですか。
(美術館）ほぼ横ばいで、企画展が3千万ぐらいで、収蔵作品展が4百万円ほどです。白書の中でいうと施設運営費の中に入ります。
(委員）今年度は、開館20周年の浅井忠展がメインだったと思いますが、非常にオーソドックスな展覧会のラインナップで、そういう意味では、直球を投げまくったという感じで、佐倉の美術館らしさが出ていました。だんだんと24年度の3万人に戻りつつあるということで、成果を得られたのだと感じます。特に浅井忠展の、有料入場者数の割合が多いという点では、美術館のアイデンティティに関わるような直球が、市民の皆さんに受け入れられたのだと思います。一方で、直球ばかりだと打たれるので、日本近代洋画、あるいは日本近代美術というのが、一つの中心であるとは思いますが、例えば、ヨーロッパやアメリカなど、海外の展覧会は、26年度は開くことができなかった。あるいは以前の、ルパン三世展のような、漫画やアニメ、現代的で若者に受けるような、それが変化球になるかどうかは、わかりませんが、来年度以降、浅井忠を軸にしたラインナップのほかに、もう少し幅広く、企画を考えられたらいいかなと思いました。でもよかったと思います。浅井忠展が成功されたということは。
(美術館）浅井忠展は、おかげさまで図録もたくさん売れまして、増刷をしました。20年続けてきたことの価値を示せたと思います。後ほどご案内しますが、27年度は変化球を組み合わせていきたいと思います。
(委員）パスポートの使用率が2.6%と0.7%ということで、具体的にはわからないのですが、もう少し欲しいなあと、何かきっかけがあればなあと思います。それと12月までの入館者ですが、数字だけでは判断できないですけれども、前年同月比で6,930人の減、これはどういう原因があるのか。この2点を教えていただければ有難いです。
（美術館）浅井忠は、佐倉学によって市内の小中学生にはよく知られています。その知名度に対して2.6%という数字は、厳しい結果であると感じています。たくさんの子供たちに見てもらいたいという思いは強いのですが、どうしても内容的に難しくて、足がなかなか向かないのかなと。そのあたりもふまえまして、27年度の構成を考えております。この数字を上げられるように、引き続き努力を続けていきたいと思います。入館者については、主催展に入った入場者数と、3階の市民ギャラリーの団体展に入った入場者数のほかに、カフェに入った人数

等を受付でカウントしていますので、主催展の入場者数が増えていることとは矛盾しないのかなと思います。
(委員) 統計を見た私の感想を述べますと、有料観覧者数の割合、80.4%と 75.2%という数字は、一般的な博物館からみますと、驚異的な数字だと思います。よく入っているなと。有料の範囲を広く設定しているのだと思いますが、たいがいは、有料入場の割合が３０か４０％も行けば多い方かと思います。
　県立の美術館も博物館も、小学校と中学校の新１年生に対して、7 館ある博物館の有料無料にかかわらず、企画展にプラス 2 名まで引率者も入場無料というのを、今年でもう 3 年目になりますが、来年も行う計画で進めておりますけれど、小学生の低学年はいいのですが、高学年や中学生になると、なかなか来てくれないというのが現状です。利用率から言えば、1～２％ぐらいしかないという状況です。
　県としても、いかにして博物館に足を運んでもらうかというのを、考えておりまして、昨年から 7 館のうちの５館まわると、要はスタンプラリーと同じですね、高額なものではないのですが、クリアーファイルであるとか、ちょっとしたものをあげると、意外とお子さんたちも喜んで来てくれるというのがありますので、もしこれがきっかけになるのであれば、ひとつ試してみる価値はあるのかなと思います。１回でなくて２回来ればということになると思いますが。
　それと白書のほうですが、これはまあ平均的な数字かなと思います。収支比率が 3.2%というのは。博物館ですと、指定管理との関係もあるのですが、収益を上げるというのは、土台無理な話でして、収益が上がらないから公でやっているともいえるので。3.2%というのは、平均的というか、よく頑張っているなと思います。ただ、財政当局からは、もっと収支率をあげるように言われるのだろうなと思います。
　県の場合ですと、当初に見込んだ歳入額よりも落ちた場合には、その分を配分された予算から返すというやり方までとられています。つまり、財政の方から言わせると、まだまだ努力が足りないということになるわけですが、逆に今度は萎縮してしまって、歳入見込みを低くすると、今度は、財政は前年よりもあげなさいと言ってくる。結局、財政当局というのは、そういう数字でしか評価していないのですね。そういう中で、どうしたら歳入をあげられるのかなと、そういう工夫が必要になってきますね。
(委員) こういう数字が、今まではあまり出ていなかったのです。よく言えば学術的な話が多かったのですね。でもこういう数字や、金銭的な話も必要だなと思いましたね。
(委員)私は、美術館のこういう会議に、いろいろ出ていますが、こういう数字はほとんど見たことがありませんね。単年度で見てしまうと、こういうことにな

ってしまいますが、美術館というのは、中長期的な視点で見ていただきたいですね。26 年度は、浅井忠、安井曾太郎、非常に質の高い展覧会だったと思います。中長期的に、あるバランスを持って、ある年は、現代美術の展覧会があったり、海外展があったり、漫画アニメの展覧会がある。行政に言ってやった方がいいですよ。中長期的に見てくれと。めげることはないですよ。
(委員) これだけの経費がかかっているのですから、もっとたくさんの人に見ていただきたいと思いますね。そのためにも、いろんな人を誘っていきたいと思います。
(委員) 佐倉市の人口から考えると、入館者数はかなり多いと思います。例えば千葉市美術館であるとか、東京都の美術館であるとか。恐らく全国的に見ても、高い水準だと思います。佐倉市として誇れる数字になると思います。
(委員) 支出が 1 億 4 千万円ということですが、この 20 年間で、予算額の推移というのはどうなっているのでしょうか。大まかで結構ですけど。
(美術館) 今、手元に資料がないので、後ほどお答えしたいと思います。
(委員) 美術館・博物館に関わる国庫補助金などは、受けているのでしょうか。
(美術館)単発ではあります。最近では昨年度の国立美術館巡回展です。
(委員) まだ、どこの市町村も、財政状況が好転していませんから、そういったものを活用するのも一つの手ではあると思います。
(美術館) そういった情報は、なるべくとれるようにしています。来年度も 1 件、検討している補助金があります。
(委員) 作品購入予算の、復活の目途はないのですか。
(美術館) 今のところ、財政当局からは、購入のための基金は使うなと言われています。ただ、これは、どうしても佐倉に必要な作品だというものが出てくれば、その時は、財政に相談をしたいと思います。
(委員) やはり、作品を購入していかないと、学芸員が育たないと思います。もらうのもいいですけれど、コレクションを作っていこうというときは、次はこれが買いたいと、学芸員が考えて、そのために学芸員が探してくるというのをやらないと、育たないですよね。たしか、佐倉市の場合、年度当初の予算ではなくて、個別に議会を通して、予算を組むというようなことを、やっていませんでしたか。
(美術館) 2 種類ありまして、文化課で持っている文化財産取得基金で購入する場合と、例えば、浅井忠の作品等ですと、作品ごとに予算を議会にかけて購入するという、2 通りの方法があります。取得基金のほうは、今は使わないようにと言われておりますので、購入するとしたら、単発で年度当初に予算要求をして、ということになると思います。ただその場合でも、他の事業予算が、その分減ってしまうということになると思います。

（委員）いい絵を探してきて、予算要求してみるというのも、一つの方法だと思います。予算は、若干シーリングがかかっているのですか。
(美術館）来年度予算は、10 月以降、消費税１０％になることを見込んで積算しましたが、総額は前年度並みにするように言われていましたので、実質、前年度予算からは減額です。
(委員）人を育てるためにも必要だと思います。コレクションも増えませんから。
(委員）それでは 26 年度については、ここまでにしたいと思います。

平成 27 年度事業計画等について
＜美術館から説明＞

(委員）先ほど文化庁の補助金の話もでましたけれど、魔法の美術館はキーワードがいくつも入っていると思います。来館者参加型、地域に密着した展覧会。それからメディアアート、大学と連携。三拍子揃っています。これは強いです。補助金などホームページ探せば、どこか出てくると思います。文化庁の補助金ですと、採択率が 3 割とかその辺です。県を通さずに、市が直接、文化庁に申請できる補助事業なので、こういうのは是非やってみたらどうでしょう。市町村の美術館で知っているところは毎年のように、ちゃっかりもらっているところもありますね。知らないところは本当に知らないのです。ですから、そういうのを上手に使えるといいと思います。ただ 27 年度の締め切りが、とても早いと思います。来月早々かもしれません。
(美術館）まずは締め切りを調べて、もし間に合わなくても、次年度以降に活かせればと思います。
(委員）昨年の安井曾太郎展は美連協、読売新聞社、他の美術館との共同事業ですよね。27 年度はそういうのはありますか。
(美術館）連携ではないのですが、魔法の美術館は企画会社が入っています。川崎市等でもそうなのですが、毎回、会場によって少しずつ作家等を変えています。高橋真琴展は企画会社と画廊がついていまして、そこのコーディネーターと話をしています。百貨店等、小さな会場で行うことが多いのですが、今回、美術館ということと、スペースの広さということもあって、美術館ならではの、規模の大きな展覧会になると思います。
(委員）ということは、来年度の企画展では、先ほどの補助金のような外部資金はないということですか。
(美術館)はい。ミテ・ハナソウは自主企画となります。
(委員)ルパン三世のときのように、高橋真琴展もマスコミと共催できれば、資金面でいただけなくても、広報の協力をしてもらえればいいと思います。若い人

から、おばあちゃんまで見てもらえる展覧会のようですから、マスコミ、例えばＮＨＫとか、新聞社等に働きかけられればいいですね。
夏休みにミテ・ハナソウ展ということで、昨年の浅井忠展も、夏休みの入場者が多かったと思います。教育普及的な鑑賞教育の展覧会なので、子供を意識して夏休み、という会期の設定なのでしょうか。高橋真琴展も、夏休みでもよかったぐらいですね。まあ、全体のバランスもあるでしょうが。
(美術館)そうですね。他の会場との関係などもあり、この時期になりました。
(委員)高橋真琴展は佐倉の会場だけで開催ですか。
(美術館)島根の美術館でも今回の展示の一部を使って開催しますが、佐倉は地元ということで、ご本人に思い入れもあって、大々的な個展を開きたいという気持ちもあるので、副題として「佐倉で描かれた少女たち」としています。
(委員) 収蔵作品展のタイトルに、26 年度の「佐倉の工芸」や作家名があると、内容がわかりやすいのではないかと思います。タイトルになくても、作家名などがここにプリントされていると、すぐに内容がイメージしやすいかなと思います。
　話が戻ってしまいますが、予算、決算、経費、いろいろあると思いますが、行政なので、あまり利益の追求というのではなくて、たくさん市民が来てくれれば市民への還元なのだという、根本的な考えで進めていったらいいと思います。
(委員)今までの企画と、来年度の企画はかなり変わっているので、また期待したいと思います。
(委員)そうですね、随分印象が変わりました。美術史の観点から、大きく振りかぶったような展覧会ではないけれども、普通の人が見たくなるような視点ですね。
(委員)ミテ・ハナソウ展は、育成されたコミュニケーターの方が初めてということで、どのような形でやるのか、来場者の方がどんなふうに感じるのか、様々な分析の仕方を考えておられるとは思いますが、分析をして次に生かしていただきたいと思います。
(委員)ミテ・ハナソウは是非、アンケートを実施していただきたいです。他の２展で、間に入っている企画会社はどちらですか。
(美術館)高橋真琴展はブランネージュ、魔法の美術館展はステップイーストという会社です。ブランネージュは百貨店の販促のイベントなどをやっている会社です。
(委員)こういうのは、企画会社のほうから美術館側に声をかけてくるのですか。
(美術館)その展覧会ごとにいろいろです。高橋真琴展の会社は、画廊から紹介された会社です。

(委員)魔法の美術館展は、具体的にはどのようなものですか。
(美術館)インタラクティブな映像、人が動くとそれに合わせて映像が動くとか、変わるとか。布が垂れ下がっているところに、光をとおすビー玉が入っていて、触るとキラキラ光るようなものであるとか、他館では光の美術館展と名付けたところもありました。その場所に作家がいなくても展示体験ができます。
(委員)ミテ・ハナソウ展はどのような作品を出すのですか。
(美術館)まだこれから検討していきますが、対話型の鑑賞に適した作品といいますか、わかりやすさと多義性という視点で、選ぶようになると思います。ボランティアの人とも相談して決めていきます。
(委員)マネジメント、どうやって稼ぐかという点では、有料の二つの展覧会では、ある程度収入を上げなければならないし、ミテ・ハナソウ展では学芸員の力量というか、鑑賞教育ということで、性格が違うと思うのですが、夏休みの間で、子供たちがたくさん来てくれれば、秋と冬の大きな展覧会の布石というか、戦略的に考えて、少し高橋真琴のことや、魔法の美術館の話をしてあげるとか。リピーターで、パスポートを持って２回３回来てくれるかもしれないですしね。性格の違う３つの展覧会ではあるのだけれども、無理やりこじつける必要はないですが、少し紹介していけばいいと思います。
(委員)随分と今日は、突っ込んだ、いい話ができたと思います。ありがとうございました。